

もくじ

新常設展示紹介 ① 50分の1千住宿模型… P1

「基部銘板碑」小考… P2 おひけ煙突60年追録(終) なんの工場なの?… P4



【図1 千住宿模型(部分)】左下が高札場、写真中央の榎がある場所が一里塚、その上が馬寄場、先の2階建て瓦ぶきの屋敷が飛脚問屋中屋、写真上部中央(道の左側)が問屋場と貫目改所です。今回の改修で補修が行われ博物館第一展示室に再登場しました。

足立史談

第688号

2025年6月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

新常設展示紹介 ①

50分の1 千住宿模型

郷土博物館

上が経過し、彩色や接着の劣化など傷みが目立つようになりました。そこで今回の改修に合わせて補修と分割(後述)を行い博物館に再び移設しました。

制作から三〇年以上経たないにもかかわらず、色褪せや接着の劣化など傷みが目立つようになり、補修と分割(後述)を行い博物館に再び移設しました。

1 模型の移設

千住宿模型は、郷土博物館が昭和六一年(一九八六)の開館、平成二一年(二〇〇九)の第一回展示改修に続く大規模な施設改修で、常設展示も二回目の改修で多くが新しくなっています。このリニューアルを記念して、今回から連載で主な展示資料をご紹介します。

2 江戸後期、宿場の中心部

■いつの時代? 模型の基本参考資料となったのは「日光道中分間延絵図」(調査、文化元・一八〇四年)、完成、文化三・一八〇六年)や「宿村大概帳」(天保十四・一八四三年)などが用いられました。したがって模型の対

象年代は江戸時代後期の文化から天保頃(一八〇〇年代前半)という時代になります(「開館記念 千住宿」)。

■宿場のどこ? この模型は、宿場の中心部である千住一丁目の南端を再現しています。問屋場や一里塚、高札場などが集まるエリアです。

模型のサイズは長さ四一二cm、幅一二〇cmで、縮尺は五〇分の一。これにより、約二〇六m分の範囲が再現されています。宿場全体の長さは約二・三kmなので、宿場全体の約十一分の一のエリアを再現していることになりました。ただし、街道沿いのみを再現しており、奥行き(東西方向)はそれぞれ約三分の一に限っています。

3 史料と模型

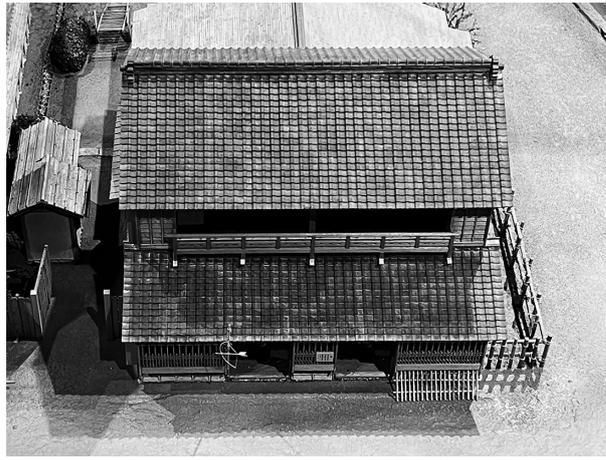
模型は資料を駆使して復元されました。たとえば「高札場」もそうで、江戸時代後期の絵図にある高札場をもとに現存する事例を参照して表現されています。

千住宿は旅人たちが身だしなみを整えたと考えられ、髪結い職人が多かつ

たこと(三三軒)や、湯屋(風呂屋。六軒)があつたことでも知られています。絵図と資料から、模型では髪結床(床屋)や湯屋も復元されています。

4 繁栄した宿場のすがた

かつて人口約一万人を誇り、江戸四



【図3】湯屋 左下の看板「弓矢」(「湯入る」から)も復元



【図2】高札場の史料(織畑家文書)

宿(品川、板橋、内藤新宿、千住)で最大の宿場でした。しかし千住宿の画像史料は、象徴的な千住大橋がほとんどで宿場の様子を伝えるものは少ないのが現状です。

繁栄の要因は問屋、職人など、様々な職業の人々が集まり、商都として栄えたという千住宿の特色にあります。そのことを伝えるため模型が制作されました。千住宿は今年で四〇〇年。この機会にぜひ足をお運びください。

(学芸員 多田文夫)



【図4】日光道中の左右に建ち並ぶ商家

「基部銘板碑」小考

関口 崇史

足立区立郷土博物館には延文六年(一三六二)三月十日銘阿弥陀一尊種子板碑が所蔵されている【拓影1・表1番号5】。

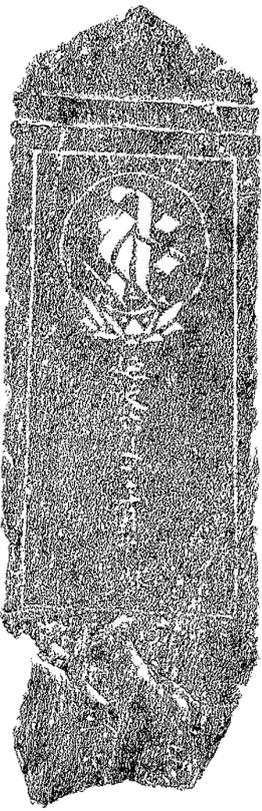
同板碑は、板碑を調べる会により紹介され、その来歴については「おそらく他地域からの招来品と思われる」としている(同会)『足立区文化財調査報告 板碑編』補遺(三)、『足立区立郷土博物館紀要』二〇、一九九八年)。その後、同板碑の基部に「三、十」の銘文【拓影2】が存在することが報告された(教育委員会事務局文化課文化財係「足立区所在板碑銘文集成」『足立区立郷土博物館紀要』三〇、二〇〇九年)。

【拓影2】基部拓影

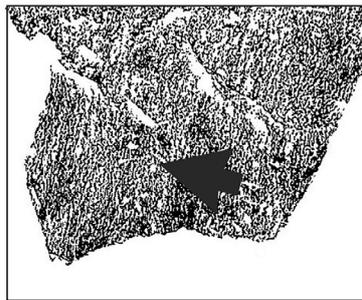
■基部銘板碑 紹介した板碑のように基部に銘文を有する板碑は「基部銘板

碑」と呼ばれている。そして、延文六年三月十日銘板碑の紀年銘の「三月十日」と基部銘「三、十」が対応するように基部銘は板碑の塔身面の銘文と内容が一致する。

伊藤宏之氏は現存する基部銘板碑について川口市に一三基、さいたま市岩槻区岩槻の久伊豆神社に一基、そして、郷土博物館の一基の計一五基の事例を紹介している(伊藤、二〇一六年)。伊藤氏によれば、最古の基部銘板碑は、さいたま市岩槻区の久伊豆神社所蔵の文保二年(一三一八)三月九日銘阿弥陀一尊種子板碑で最新の板碑は永和二年(一三七六)十一月二十七日銘阿弥陀一尊種子板碑である。



【拓影1】番号5 阿弥陀一尊種子板碑



【拓影2】「三 十」

伊藤氏は最古の基部銘板碑（文保二年）のみ鎌倉時代作製であることと地域が異なる点から、川口市に現存する板碑とは性格が異なる可能性を指摘している。首肯できる意見であり、今回の考察においても除外した。文保二年

銘板碑を除く一四基の板碑の製作年代は南北朝期の文和四年（一三五五）～永和二年（一三七六）の約二〇年間であり、所在地も川口地域に限定されるため、基部銘板碑は地域の特徴を有する板碑といえる。なお、博物館所蔵板

番号	所在地	紀年銘	銘文	基部銘
1	さいたま市岩槻区岩槻 久伊豆神社	文保2年(1318)3月9日	光明真言	文保
2	川口市赤山 源長寺	文和4年(1355)7月24日	口仏禪門	七月、廿四
3	川口市赤井 円通寺	延文元年(1356)10月18日	光明遍照偈 妙円尼口口	十八、口口尼
4	川口市上青木 道合庄陣場遺跡	延文4年(1359)5月3日	光明遍照偈	五、三
5	足立区立郷土博物館	延文6年(1361)3月10日		三、十
6	川口市上青木 道合庄陣場遺跡	延文6年(1361)3月20日		三 廿
7	川口市上青木 道合庄陣場遺跡	康安2年(1362)6月27日		六、廿七
8	川口市辻 辻字宮地第1遺跡	貞治2年(1363) *上部を欠く	(長空) *上部を欠く	長空、貞治二年、 三、三
9	川口市上青木 道合庄陣場遺跡	貞治4年(1365)11月20日	光明遍照偈 相道禪門	十一、廿
10	川口市江戸袋 東光院	応安元年(1368)6月21日	明善	六、廿一
11	川口市上青木 道合庄陣場遺跡	応安2年(1369)3月22日	知長	知長、三、廿二
12	川口市安行原 密蔵院	応安7年(1374)2月17日	光明遍照偈 沙弥知阿弥	一七
13	川口市赤井 円通寺	応安7年(1374)11月7日	妙伝	妙伝、十一、七
14	川口市東本郷 個人所蔵	永和元年(1375)10月22日		永和元、十、廿二
15	川口市安行原 個人墓地	永和2年(1376)11月27日	光明遍照偈 光明尼公	光明尼、十一、廿七

伊藤氏論文「第25表 基部銘」が確認できる板碑」を基に作成

表1 基部銘板碑一覧

碑は地理的、製作年代の観点から川口地域からの流入品の可能性が高いので考察に含めている。

■基部銘の目的 造立後、土中に埋まる基部になぜ、銘文が刻まれたのであろうか。内田清氏は、「特徴のある板碑」として基部銘板碑を取り上げ、「注文の銘文を心覚えに彫った」石工（工房）の備忘のためメモであったと考えられた。さらに、伊藤氏は基部銘と塔身面の銘文の字形の比較から「推定に留まる」としながらも、その類似性を認め、基部銘と銘文は同一人物による可能性が高いとしている。筆者には銘文と基部銘の字形の比較から同一人によるものか否かを判断することはできないが、内田・伊藤両氏と同じく基部銘が石工による備忘的メモであったと考えている。

■基部銘と紀年銘 板碑は種子と紀年銘のみで構成されている事例が多く、紀年銘が供養日（造立日）なのか没年月日なのか明瞭ではない。そのため、板碑の紀年銘が「何の日」を示しているのが議論されてきた（太田、二〇一九年）。この問題について、基部銘の内容から若干の考察を試みたい。

今回取り上げた一四基中、基部に年月日が刻まれているのが二基、月日のみが一〇基、日付のみが二基となり、月日の事例が一番多い（表1参照）。しかし、一四基すべての板碑には年月日の紀年銘があるにもかかわらず、な

ぜ基部に刻まれた情報が異なるのか。それは、紀年銘に供養日の場合と没年月日の場合があったからではないだろうか。月日のみの一〇基は、供養目的の板碑のため、石工が覚えておくべき情報は祥月命日の月日だけであったのではないか。そして、年月日の二基は、紀年銘が供養日ではなく没年月日のため、年月日が刻まれたものと思われる。二基の日付のみの事例については、あるいは月命日の情報であろうか。

南北朝時代の約二〇年間、現在の川口地域で製作された基部銘板碑を手掛かりに板碑の紀年銘が「何の日」であったのかについて考察した。事例が少なく、推測の域をでないが、この時代の川口地域では、供養のための板碑が墓塔としての板碑より多く造立されていた。注文を受けた石工（工房）は追善供養では祥月命日の月日を葬送では没年月日の情報を備忘のために基部に刻み、造立に備えていたのであろう。

（足立区文化財係調査員）

【参考文献】

- 内田清「板碑」（『川口市史 通史 遍』上、一九八八年）
- 伊藤宏之「辻字宮地第1遺跡第20号溝出土の板碑について」（黒濱和彦・伊藤宏之『辻字宮地第1遺跡』川口市教育委員会、二〇一八年）
- 太田まり子「板碑の紀年銘」（『季刊考古学』一四七、二〇一九年）

お化け煙突60年追録

終 なんと工場なの？

格和 宏典

■人々のなかのお化け煙突 数多くでは
ありませんが、街の人に、「お化け
煙突ってなんの工場なの？」と聞かれ
ることがありました。

お化け煙突が火力発電所とは知らず
煙突の変化を楽しんでいた方もいたよ
うです。年齢の似通った同僚ですら入
社後初めてお化け煙突が発電所である
ことを知ったようです。

○高校の同級生 東電に入社し、新東
京火力発電所勤務となったMK君は、
「千住新橋北詰の北東三百メートル
くらいの所で生まれ、お化け煙突を見
ながら育ちました。子どもの頃は荒川
放水路で泳いだり、ハゼ釣りや搔掘り
(池や堀などの水を汲みだして魚を獲
ること)などで遊びました。

映画「煙突の見える場所」の撮影を
していたことも覚えています。
高校時代は、電車の中からお化け煙
突を見ながら通学していましたが、火
力発電所の煙突と知ったのは東電に入
ってからでした」。

○栃木県出身で一級下のAN君 「小
学生の頃、遠足で北千住を通ったとき、
ガイドさんからお化け煙突の説明があ
ったことをよく覚えています。お化け
煙突が発電所とは知らず、入社後初め

て知り驚きました。

そして、発電所に入った時、これが
『お化け煙突』かと、高さで大きさに
驚いたことも覚えています」。

○同期生YO君 「高校時代、姉が水
戸に住んでおり夏休みになると遊びに
行っていました。常磐線でお化け煙突
の本数が変化するのを車窓から眺めて
楽しんでいましたが、発電所とは知る
よしもなし。

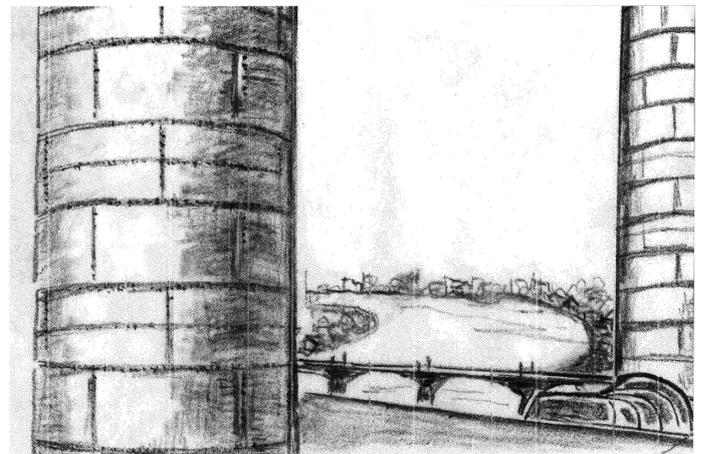
まさか自分がここに勤務するとは思
っていませんでした。」

○後年友となったKT君 「私は群馬
県倉賀野町出身ですが、高校生の頃お
化け煙突という名前を聞いたことがあ
る程度で、どこにあり何の工場かは知
りませんでした。

東電に入社して千葉県の五井火力
に配属になったので独身寮に入寮して
いました。休みで帰宅するとき、総武
本線を利用していましたが、時たま成
田・常磐線や京成本線を利用して旅気
分を満喫していました。

そして、車窓から初めてお化け煙突
を見た時、『これが千住火力発電所な
んだ』と見入っていました。

その後、そこを通るたびに、『ああ
帰ってきたんだ』とホッとしたことを



本館屋上から隅田川・尾竹橋を望む。

イラスト 格和宏典氏

前、関東大震災後閉鎖)、三十八
年には、南千住に「千住発電所」
が建設されている(大正六・一九
一七年に、変電所に転換)。タク
シーの運転手は、名称は南千住の
千住火力、行先のイメージは蔵前
の浅草火力であったのではと思わ
れる。

■自分のなかのお化け煙突 小学
校高学年の頃、誰かに聞かされた
か記憶にありませんが、「お化け
煙突ってのがあるみたいだよ」と
言われました。ちょうど「煙突の
見える場所」の映画が上映され出
したところで、言った本人も噂の話を
をまた聞きで教えてくれたのかも
しれません。煙突がどんなものか
分からず「寂しい所にポツンとあって、
ユラユラお化けのように揺れ動いて
いるのかな？」と勝手に想像していた
のですが、いつの間にか忘れてしま
いました。

後年、東電に入社し千住火力発電所
勤務を命ぜられたとき、はじめてお化
け煙突の場所と名前の由来を知ったの
です。

■おわりに 追録に、「日常生活」を
と思いましたが、私的な内容が濃くな
りそうなので、断念しました。

読者の皆様には、長きにわたり愚作
とお付き合いただきありがとうございます。
感謝申し上げます。

(元千住火力発電所所員)

覚えています」。

■先輩の話 「転勤になって挨拶のた
め鶯谷からタクシーに乗って、『千住
火力発電所まで』と行き先を告げたん
だけど、どうも浅草の方に向かってい
るようなので、『方向が違うんじゃない
かい？』って言ったたら、運転手がち
よつと考えてから、『お化け煙突です
か？』って。『そうだよ』と返事をし
たら、『乗った時言ってくればよか
ったのに』と怒られちゃったよ。

運転手は、お化け煙突は知ってたん
だけど、発電所だっことは知らなか
ったんだね。」

(註) 明治三十年(一八九七)に浅草
火力発電所ができ、(現在の台東区蔵